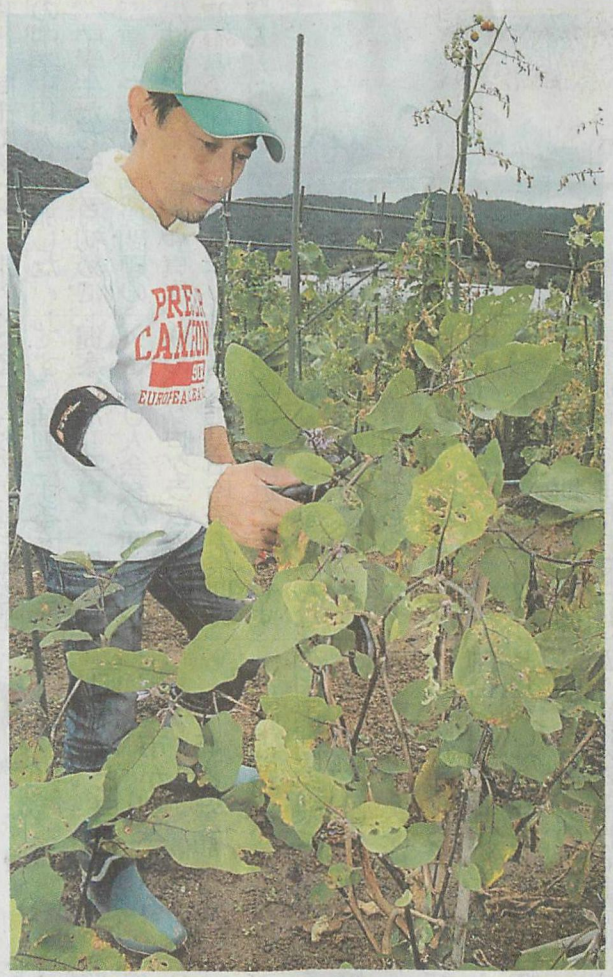
一喜一憂プロへの道

就農目指して奮闘中

篠栗町の住宅街の中に農地を借りている川内行雄さん



新規就農を目指し、体験農園で野菜作りに取り組む大野武則さん

立秋も過ぎ、体験農園ではトマト、ナス、オクラなど夏野菜が収穫時期を迎えている。同じ畑の中ではあるが、野菜の実り具合は人それぞれだ。

「試行錯誤の連続ですよ。野菜作りの手順は、昨年よりも分かってきたんですが…」。台風11号が接近していた9日、久山町の体験農園「久山ファーム」で枯れ始めたトマトの葉を切り落としながら、大野武則さん(44)＝福岡市博多区＝が頭をかいた。

就農を目指す大野さんは入園2年目。生計のためにアルバイトを掛け持ちしながら、野菜作りに取り組む。

ナスは順調に実り、実家に分けるほど取れたが、トマトは出来が悪かった。それでも来年は、栽培する区画を増やすつもりだ。

農園体験に区切りを付けた後は、農家で修行して独立する計画だ。実家が農家ではなく、農地や農機具を準備するために蓄えをつくる必要がある。ハードルは決して低くない。「農家はもうからんよ」とも言われる。「だけど、種から育てた野菜が育つのを見るのは楽しいし、収穫の喜びは、他の仕事では得難いもの。何とか道を切り開きたい」

◇ ◇

農業のプロから野菜作りを教えてもらえる体験農園は就農窓口の一つとして期待されているが、独立への道は楽ではない。就農に必要なものは何であろうか？ 昨年就農し、篠栗町で野菜8種類とコメを作っている川内行雄さん(27)を訪ねた。川内さんは造船会社を辞めた後、粕屋郡内の農家で農業を学んだという。「就農1年目は赤字。種をまいた時期が遅く、ブロッコリーは全滅しました。種や肥料代など10万円以上がパーです。一喜一憂どころか、深い一憂を味わいました」と苦笑いした。

運搬用の軽トラックや農機具なども購入。資金は国の就農支援事業から無利子で借りたが、3年目からは返済も始まる。販路は少しずつ広がっているが、まだ、目標とする会社勤め時代の収入にははるかに及ばない。「根気というか、一歩ずつ前に進んでいく気持ちが大切」と自身に言い聞かせている。

川内さんは、自分で値札を付けた野菜を、スーパーの産直コーナーで委託販売する。消費者の行動が自分の収入に直結していると、ひしひしと感じている。「数十円安いから外国産を選ぶ、というのであれば、未来は厳しいかもしれない。自分も1人の消費者として、食の安全を含めて、何を食べるべきかを考えるようになりました」。未来を担う若手農業者を支えるのは、消費者の「農」への理解だ。

（岩尾款）

良かね 粕屋の体験農園 残暑編